

第4回科学技術政策研究所機関評価委員会（第3回会合）議事録

1. 日時 平成22年10月26日（火）10：00～12：00
2. 場所 文部科学省 16F2会議室（中央合同庁舎第7号館東館16階）
3. 議題
 - I. 開会
 - II. 資料確認
 - III. 議事
 - 1) 平成22年度機関評価報告書の取りまとめについて
 - IV. 閉会
4. 出席者

委員 阿部博之委員長、新井紀子委員、家泰弘委員、隅藏康一委員、高橋真理子委員、
都河明子委員、吉本陽子委員、若杉隆平委員

科学技術政策研究所 桑原所長、伊藤総務研究官、大橋第1研究グループ客員総括主
任研究官、茶山第1・2調査研究グループ総括上席研究官、藤田第3調査研究グ
ループ総括上席研究官、奥和田科学技術動向研究センター長、富澤科学技術基
盤調査研究室長、岡部総務課長、牧企画課長

オブザーバー 斉藤文部科学省科学技術・学術政策局政策課長補佐

5. 議事録

【阿部委員長】 それじゃ、お一人、間もなくおいでになると思いますので、第4回の機
関評価委員会の第3回ですか、始めさせていただきます。座ったまま進行させていただきます。

今日の主たる目的は、前回までに委員の先生方からいろいろちょうだいしたご意見をも
とに機関評価の報告書を事務局でつくっていただいた、これです。できれば今日を
もって最終の委員会にしたいと思っておりますが、ぜひご遠慮なくご発言をいただきたいと
思います。

それでは最初、資料確認から入りたいと思います。事務局、お願いします。

【牧企画課長】 おはようございます。企画課長の牧でございます。

本日は、機関評価委員会の先生方、新井先生がまだお越しになっておりませんが、8名の
委員の先生方の出席の予定でございます。本日ご欠席は中村委員と覧具委員、このお二人

につきましてはご欠席ということで伺っております。

それから、科学技術政策研究所側の出席者でございますけれども、前回の委員会、6月でしたけれども、それ以降に人事異動もございましたので、新たに着任した者、異動した者をご紹介いたします。

まず、以前総務研究官でございました桑原輝隆が所長になってございます。

【桑原所長】 どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

【牧企画課長】 桑原の後任の総務研究官として着任いたしましたのが、伊藤宗太郎でございます。

【伊藤総務研究官】 伊藤でございます。

【牧企画課長】 それから、第3調査研究グループの総括上席研究官として、長野の後任で藤田健一でございます。

【藤田総括上席研究官】 藤田でございます。よろしくお願いいたします。

【牧企画課長】 それから本日は政策研側のメンバーでは、第1研究グループの大橋客員総括主任研究官につきましては欠席ということでご了承いただければと思います。

それから配付資料の確認を、続きましてさせていただきます。まずクリップどめの資料を、議事次第のあるところでございますが、議事次第の1枚紙、評価委員の先生方の名前のリスト、本日の配付資料の一覧の1枚紙、それから、右肩に資料番号がついてございます資料1ということで、評価報告書の案です。本日はこれをメインにご審議いただきます。それから、資料2ということでつけてございますのが前回の議事録でございます。これにつきましては、先生方にあらかじめご確認をいただいているかと思っております。その後ろに1枚紙を2枚、参考資料1、2というのをつけてございます。

それから、別のクリップどめしてございますけれども、今回参考資料ということで資料番号をつけてございませませんが、前回フォーマットをお配りしていただいたコメントにつきましては、右肩に参考資料（委員コメント）とつけてございますのが先生方のコメントを報告書の軸立てごとにまとめたもの、もう1つはA3のものでございますが、フォーマットに先生方ごとのシートでご記入いただいたものをつけてございます。それから参考資料のところに1枚、もう1つA3の表をつけてございますけれども、これは都河先生のほうからコメントをいただいております、今後の課題、前回のシリーズの機関評価と言うべきでしょうか、そのときの課題となったものを整理したものを用意してくれということでございましたので入れさせていただきます。内容につきましては、これまで説明したこと、第1回、第2

回の資料などを入れるような形で整理をさせていただいたところでございます。それから、机上資料ということでファイルのものをご用意してございますけれども、こちらは前回の資料等も入ってございますので適宜ご参照いただければと思います。

不足等ございましたら、事務局までよろしく願いいたします。

【阿部委員長】 ありがとうございます。

それでは、報告書の取りまとめに入らせていただきます。まず、参考の1、2と資料1を用いて事務局から説明してください。

【牧企画課長】 それではまず報告書の説明に入ります前に、少し、背景となります関係する情報ということで簡単にご紹介させていただきたいと思います。参考資料1と2という紙をお配りしておりますので、そちらをごらんいただければと思います。

参考1のほうですけれども、現在総合科学技術会議のほうで第4期科学技術基本計画に向けた議論が進められているところがございますけれども、最初のクリップどめの後ろのほうにつけてございます。現在、新しい状況では、基本政策調査会の中で施策検討ワーキンググループの報告書が出てきているわけがございますが、その中に、社会とともに創り進める政策の展開というものの中なんです、実効性のある科学技術イノベーション政策の推進の中に、政策の企画立案及び推進機能の強化ということでこちらに書かれておりますような記載がございます、科学技術イノベーション政策のための科学を推進するという記述記載がございます。これが第4期に反映されることになれば、第4期計画の中で私どもも含め、科学技術政策の中で、関係機関の中で対応していくということになろうかと思っております。

それから、参考資料2ということでポンチ絵をお配りしてございますけれども、こちらにつきましても、このような動きも受けてということでございますが、文部科学省本省のほうで現在予算要求をしている資料でございます。こちらにつきましても私ども政策研のほうもいろいろとお手伝いをさせていただいて、この要求は全体としては10億くらいの要求なんです、左側のほうにJSTと書いた部分がございますが、大学等にJST経由で研究グラントをつくって大学のほうで研究をいただくようなもの、それからこのペーパーで左下のほうの本省と書いてあるところですけども、幾つか「政策のための科学」の分野の人材育成拠点をつくるというプラン、それから右下のほうにございますけれども、こういう大学等での動き、科学技術イノベーション政策の研究を進めていく動きの中で共通基盤的なデータを提供していくという統計・指標に関する中核機能の強化という点については、本

省と私どもの研究所で協力しながら何かつくっていくということになっております。真ん中下くらいのところでは政策対応型調査研究ということで、特に本省のほうでも関心が高い政府の研究開発投資の影響がどうなのかというところについての総合的な研究をやるということで、全体で10億の予算要求をしているところでございます。これは背景の情報としてご紹介させていただきました。

それでは資料1のほうでございませうけれども、今回の機関評価の報告書ということで事務局のほうでまとめ、案を作成させていただきました。まず目次を開けていただきますと、全体としては3つのブロックで構成してございます。まず1番目、第1部のところでは、今回の機関評価の位置づけと経過というところをまとめまして、2番のところは、それぞれ中期計画記載事項の実施状況、それから各事項の評価ということで、個別の事項についての評価について書かせていただいております。それからそれをまとめまして、3部のところで今後の課題ということで全体をまとめたものをつくらせていただいております。

1ページ開けていただきますと、今回の機関評価の位置づけということ等を書かせていただいております。1ポツのところを書いてございませうけれども、今回機関評価のシリーズとしては4回目のシリーズになるわけなんです、これまでは3年に1回やってきたところなんです、これは前回の機関評価のご意見なんかも踏まえまして、科学技術基本計画の期間に合わせるような形で5年に1回、5年ぶりの開催ということで今回させていただきます。評価項目につきましては、中期計画の履行状況について中期計画期間中の活動実績をご評価いただいたというところでございます。

2ページのところで検討経過とございませうけれども、阿部先生を委員長とする委員会をつくりまして、3回、これは今回で最終回になるならばという仮定でございませうけれども、検討させていただいたところでございます。

さて、1ページめくっていただきまして、3ページから各事項の評価というところでございます。構成といたしましては、それぞれ箱の部分に中期計画の要点ということで、中期計画で書いた記載、それからその下に中期計画の実施状況ということで、これは前回、前々回も説明させていただきましたが、これまで5年間何をしてきたかという活動の概要を書かせていただきまして、評価のところにつきましては、先生方からいただきましたコメントを踏まえまして当所内でも議論いたしまして、こういう記載を書かせていただいたところでございます。

【阿部委員長】 評価のところだけ読んでいただけますか。

【牧企画課長】 そういたしましょうか。評価のところも読み上げさせていただくというところでよろしいでしょうか。

まず1ポツのところ、科学技術政策研究の中核機関としての役割というところの、3ページの下のほうでございます。研究所、これはその前のほうで科学技術政策研究所のことを指すわけです。「研究所は、我が国の研究開発活動及び科学技術政策の実態把握、並びにその効果検証に資する基礎データの収集及び分析に関する中核機関として、非常に重要な役割を果たしている。また、文部科学省直轄の研究所との位置付けではあるが、政府全体の科学技術政策に資する調査研究を行っている点も高く評価できる。特に、第3期科学技術基本計画のフォローアップに係る調査研究をはじめとして、総合科学技術会議、文部科学省等のニーズに応える調査研究の実施に努めており、その役割を十分に果たしている。また、日本の数学研究に関する調査研究のような将来顕在化する可能性のある課題を予見し、自発的に深く掘り下げる調査研究に取り組んでいること、大学や企業等外部の研究者を客員研究官や特別研究員として活用していること、内外の関係機関との連携による成果を着実に挙げていることなどは高く評価できる。他方、我が国の科学技術政策研究の中核機関として、特に海外に向けての情報発信と海外機関との連携についてはいまだ不十分な面があり、さらなる強化が望まれる。また、一般国民に対する情報発信にもさらに努めることが望まれる」。これが1ポツのところの記載でございます。

続けて、この後も同様にまいりましょうか。

【阿部委員長】 はい、お願いします。

【牧企画課長】 では、2ポツのところにつきましては、2、3、4のところは管理運営に関するところでございます。まず、2につきましては、適切かつ効果的な研究所運営等という項目でございます。評価のところは5ページの中段あたりに記載してございます。

読ませていただきます。「研究所長のリーダーシップの下、四半期ごとの内部報告会等により、個々の調査研究の進捗状況を的確に把握した適切な指導を行うなど、効果的な研究所運営を行ったことは高く評価できる。また、インターネットを活用した調査の導入や、データ収集・集計等に際し民間シンクタンクを有効に活用することによって、効率良く調査研究を行っている。第3期科学技術基本計画フォローアップ調査における科学技術振興調整費の活用をはじめ、外部資金の獲得に関する努力は評価できる。今後は、情報システム、広報機能を一層強化することが望まれる」。2ポツのところでございます。

えーと、今ちょっと……。

【高橋委員】 1つ1つ意見を言っていいですか。

【牧企画課長】 どうでしょうか。

【阿部委員長】 今言いたいですか。

【高橋委員】 だってこれ、最後まで行って、最初に戻るというのも何か……。

【都河委員】 わからなくなりますね。

【牧企画課長】 そうでしょうか。

【阿部委員長】 じゃ、もし何か途中で、後でいろんなところに関係しますからご意見をいただきますが、いいですよ。どうぞ。

【高橋委員】 いいですか。

【阿部委員長】 もし、今ここでぜひご発言したいということがあったらおっしゃってください。

【牧企画課長】 もしくは、管理運営のところだけで1回切って。

【高橋委員】 ああ、3まで行ってね。

【牧企画課長】 2、3、4までで1度切るという感じで。

【高橋委員】 わかりました。じゃ、そのようにしてください。

【牧企画課長】 じゃ、先に3ポツのほうを。あ、差しかえが。委員のコメントでいただいた資料に抜け落ちがあったようですので、ちょっと今、差しかえ版を配付させていただいております。

3ポツの、人材の確保等のところの評価については6ページの下のほうに書いてございます。「研究所が科学技術政策関連分野の若手人材のキャリア形成の場になっていることは高く評価できる。実際研究所において過去に調査研究活動に従事したことのある者が、その経験を活かして、大学、研究機関、及び外部の行政部局等で活躍している。国の組織であることによる定員・人件費の制約がある中で、外部専門家や民間企業の人材を上手に活用して効果的な調査研究を行っていることは評価できる。第3期科学技術基本計画フォローアップ調査を全所的体制を構築し機動的に実施したことは評価できる。外国人研究者の受け入れについては、短期の研修の実施を始めたことは評価できる。長期滞在の外国人研究者の受け入れについては実現しなかった。今後、海外の研究機関等との連携を深めるためにも、外国人研究者の多様な受け入れに積極的に取り組んでいくことが望まれる」、でございます。

それから7ページ、4ポツのところ国内、海外機関との連携というところでございます。

7ページの一番下のところに評価がございます。「政策研究大学院大学（GRIPS）との連携及び一橋大学との共同研究を開始したこと、約2,000人の専門化ネットワークを維持していること等、国内機関・研究者等との連携は高く評価できる。今後は、日本学術会議や国内学協会との交流の拡大をさらに推進することが期待される。中国及び韓国の科学技術政策研究機関との交流、科学技術予測に関するフィンランドとの共同研究実施は高く評価できる。今後は、他の海外有力研究機関・研究者等との交流を拡大することが期待される」というところでございます。ここまでが、管理運営に関する記載でございます。よろしくご審議お願いいたします。

【阿部委員長】 それじゃ、ここまでのところご意見がございましたら。まず、高橋委員。

【高橋委員】 私、きのう通して読んだんです。すみません、もっと早く読めばよかったと思って。ちょっと違和感を幾つか持ったところがあって、特に、この2番の評価なんですけれども。

【阿部委員長】 2番？

【高橋委員】 研究所の運営。この皆さんのコメントのほうを読むと、そこに書いていないことがこっちに書いてあり、書いてあることが書いていないというのが非常に顕著なのがこの2番の研究所運営のところだと思いました。

ここの議論で、しゃべったことが盛り込まれているんだったら、すみません、私はそこまではきちんと調べていないのであれですけれども、コメント集だけを見て、そのコメント集を例えば普通にまとめるとしたら、私、ゆうべちょっとつくって見たんですけれども、この評価は、「おおむね計画通りに運営されており、文科省傘下にもかかわらず政府全体の科学技術政策にかかわる調査研究を行っている点が高く評価できる」。ここは似たような文言があります。「資金源については、本予算の確保の努力が望まれる一方、さらに産業界と連携した研究も行い、資金源を一層多様化するべきだろう。研究者の科研費取得が、平成19から20年度に比べ21年度が少ない点は懸念される。ただし、科研費取得については民業（大学での学術的研究など）への圧迫にならないように留意すべきだという指摘もあった。管理部門の組織も旧態依然としており、改善の余地がある。また、積極的に活用してきている民間シンクタンクの委託研究成果を十分に評価することが必要である」というのが皆さんのコメントをまとめた評価になると思うんです。それと今回出てきたのとは何か大分違うので、どうしたもんかなというのが今日ご審議いただいたらいいかと。

【都河委員】 私も発言したいのですが……。

【阿部委員長】 どうぞ、じゃ、関連。

【都河委員】 作成していただいた評価案が全て「評価できる、期待される、望まれる」と甘すぎると思います。委員のコメントはもっと厳しく、さらに何が必要であるとコメントしているはずです。また、例えば、5ページの2に「研究所等のリーダーシップのもと」と書いてありますが、どなたの委員も申ししていないと思います。

【阿部委員長】 書いていない？

【都河委員】 また、委託研究のところでも、「委託研究成果を十分に評価することが必要である」等素晴らしい委員のコメントがあるのですが、評価案が「評価できる、期待される、望まれる」で終わっています。こうしたら如何かというサジェスティブな提案部分が削除されています。自己評価が甘く、厳しいところがないとステップアップされないというのが私の全体的な意見です。

【阿部委員長】 それはしかし……。

【都河委員】 委員のコメントはかなりシリアスなんです。

【阿部委員長】 5ページに限らないわけですね。

【都河委員】 そうです。全体的に感じました。

【阿部委員長】 どうぞ、ほかの委員の方も。特になければ、事務局から発言してください。お二人の……。

【牧企画課長】 一部分、中期計画の部分に対する評価のところについては、先生方のコメントを、何ていうんですか、中期計画に書かれている部分を、愚直に評価を入れようとしていくと、これは前回もしくは前々回にご説明した部分のところで、多少言葉を補わせていただいた部分があるというところであります。それから、評価が甘いんじゃないかというご指摘に対しては、そこは記載ぶりをもう少し変えさせていただいて、具体的などころは確かにあまり入れない形でまとめてしまったというのは事実かなと思いますので、そこは少し具体例を入れるような形で整理させていただければなと思います。

何かございますか。

【伊藤総務研究官】 ちょっと補足させていただきますと、私、第1回目、第2回目に出ておりませんが、基本的に評価の進め方といたしましては我々のほうの自己評価をご紹介させていただいたかと思います。それにつきましてコメントのあった部分、あるいはない部分というのが多分あるかと思います。このコメント集のほうには、コメントがあった

部分についてトピックス的にずっと出てきている。今回の評価の取りまとめに当たりましては自己評価で、その自己評価をよしとするかどうかといったような全体の部分プラス、コメントをいただいた部分をそれにのっけるというような構成になっております。よって、ほぼ網羅的にすべての項目にわたってある種の評価がなされたという形には書いてございますけれども、我々がご説明させていただいた自己評価といったものについて、ちょっとその自己評価は甘いんじゃないかということがあればそれはまた修正しながら、この中期計画全体にわたりまして評価をする必要がございますので、そういう観点からコメント集にはないような言葉も含めて広目に書いてあるというのが、現在の取りまとめになっております。

あとは、若干甘いんじゃないかということもございまして、確におっしゃるように、望まれるとか期待されるといった表現になっております。ここら辺が、そういうべきであるとか、あるいはそういう必要があるといった言いぶりに表現を変えることによって、これはかなり変わってくるかと思えます。唯一、一番最後にまたご説明いたしますが、今後の方向性ということで、16ページ以降に具体的にこういった評価を踏まえて何をするとといった評価部会としての方向性が書いてございます。そちらのほうの表現ぶりは、何々すべきである、あるいはそういう必要があるといったようなことで若干強目に書いておりますが、前のほうの評価についても、表現ぶりを見直させていただきたいということでございます。

【阿部委員長】 表現ぶりが甘いというご指摘が1つですが、もう1つは高橋委員が言われるように、委員のコメントがあまり評価のところに書かれていないということですが、そこは何か、事務局で。委員の意見でも、これは違いますとかいうのがあればそれは構わないですけど。

【牧企画課長】 物によっては、2ポツのところでしたらいただいていたコメントを別のところに記載するとか、そういう調整をさせていただいたようなところもありまして。例えば、2ポツのところから阿部先生からいただいていたコメントは、2ポツにかかわらず全般にもかかわってくるので全般のところのコメントに書かせていただいたりとか、そういう出し入れをいろいろとやっているという面もございます。

【高橋委員】 これで一番私は違和感があったのは、効果的な研究所運営を高く評価しているんですけど、おおむね計画通りに運営されているというのがこちらのコメントなんですよね。それは、効果的な運営を高く評価したというふうに書かれるとちょっと違うん

じゃないのという、その違和感が一番強かったです。

さらに言えば、民間シンクタンクも有効に活用しているということじゃなくて、活用するんだったらその成果を十分に評価することが必要だというコメントなんですよ。だから、活用はもちろん悪いことだとはだれも言っていないと思うんですけども、今の活用ぶりが有効に活用できていますねという評価ともちょっと違うんです。使うなら、もっとこういうふうにしたほうがいいですよというコメントがこちらの委員会の中で出てきているので、それを有効に活用することによって効率よく調査研究を行っているまとめられてしまうと、ちょっと違うんじゃないですかと思いました。

【阿部委員長】　まとめれば、繰り返しになりますけども、大きく言えば2点で、全体が表現が甘過ぎると。それと、今高橋委員が言われたように委員のコメントと少しずれているんじゃないかということ、ざっくり言えばその2点だということですね。だからそこを修正する必要があるわけで、具体的にどう修正するかというのは、高橋委員はもう案をつくっていただいておりますけれども。

【高橋委員】　いやいや。

【阿部委員長】　それを参考にさせていただくにしても、少し作業が必要になると思います。そういう点がほかにも出てくるかもしれませんが、今読んでいただいた範囲内でどうでしょうか、ほかの委員の方。もしなければ、後でまたご意見を伺うことにして、同じようなことが出てくるかもしれませんが、次に移らせていただきますが、よろしいでしょうか。

それじゃ、次、進めてください。

【牧企画課長】　それでは、5ポツ、8ページから……。

【都河委員】　7ページに「今後は日本学術会議や国内学協会との交流の拡大」と書いてありますが、できればJST、国立教育政策研究所等との交流も拡大して行ってほしいと思いました。

【阿部委員長】　ありがとうございました。

【牧企画課長】　具体例を挙げるとすると、JSTへの呼びかけをやっていくなり、理解増進をやっているところですか、あとは国立教育政策研究所というような機関が……。

【都河委員】　そうですね。2つだけ書いてあるので、等でもいいのですが、入れられたら入れてほしいなど。

【牧企画課長】　例を挙げるとしたらそういう機関ということで。

【都河委員】 はい。

【伊藤総務研究官】 ここは、実は前のほうの文章で国内機関・研究者との連携を既にやっている中に、今おっしゃいました2つの機関が入っておいりましたので、後半のほうでは割愛してしまいましたけれども、そういった今やっているところとも交流の拡大をさらに推進するといったような意味で、やはり「等」を入れるなり、明示的に若干の機関を追加させていただきたいと思います。

【阿部委員長】 初中教育と高等教育が分かれているのは、学術研究も分かれていますけど、その縦割りは昔から指摘されているいろいろこちらでも苦労されていると思いますが、少しそこは焦点を当てたほうがいいのかもかもしれませんね。それじゃ、どうぞ。

【牧企画課長】 それでは、8ページから各分野のほうの評価ということになるわけですが、ここは、2章のところまで一通りお読みするというところでよろしいですか。一度、16ページから3章になりますけれども、その前で一たん切る……。

【阿部委員長】 とりあえずやってみましょう。

【牧企画課長】 じゃ、まず5ポツのところについては、9ページのほうをめぐっていただきまして、こちらを読ませていただきます。「科学技術システムに係わる様々なデータの更新を毎年着実に実施してきたことは評価できる。定点調査や科学技術人材に関する大規模調査をはじめ科学技術政策研究所でしか手掛けられないような調査を実施した業績と貢献は評価できる。また、数学研究の重要性を社会に知らしめた効果は非常に高く、その波及効果も大きかった。ポストドクター等の進路動向、研究人材の流動性とキャリアパス分析は優れた成果であり、特にポストドクターや関連研究者が同調査結果を知る機会が多くなるよう、多様な媒体を通じて情報発信を行っていくべきである」。

続きまして、6ポツ、イノベーションに係る調査研究、9ページの一番下のところでございます。「イノベーション測定手法の検討については、多様な角度からイノベーションに係る重要な研究テーマに取り組んでおり、研究内容としても質的な向上が見られる。産学連携や大学等発ベンチャーに係る調査を継続的に実施することで、産学連携のボトルネックになっている課題を分析してきたことは評価できる。民間企業の研究開発動向やイノベーション活動の実態を適切に把握するため、民間企業の研究活動に関する調査を文部科学省から移管した上で研究所で新たな調査設計の下に実施していること、全国イノベーション調査を6年ぶりに実施したことは高く評価できる。全国イノベーション調査については、今後は実施の周期を短くして継続的に実施し、データベースを逐次更新していくことが期待

される。科学技術政策研究所が有する統計データについては、他機関が有する統計データとの接合を行いつつ、分析の幅を広げていくことが期待される。今後とも、独自の切り口からのより深い分析とポイントを押さえた提言の発信が望まれる」。

7ポツ、将来発展する分野・領域の探索に係る調査研究ですが、こちらについては11ページの中段くらいでございます。「研究所が発行している『科学技術動向』誌は、類似物の無い特徴的で良質の刊行物と評価されている。同誌は科学技術政策の企画・立案に携わる行政関係者に幅広く提供され、活用されているとともに、国内外から多くのアクセスを得て、大学院教材なども含めて多様な用途に活用されている。科学技術専門家ネットワークについては、システムの時代遅れになっている面があることから見直しが求められる。科学技術予測調査については、国の『イノベーション25』策定に直接貢献した。特に第9回調査に際しては、社会ニーズを指向した内容とするため、従来のデルファイ調査とシナリオ執筆に加えて、ワークショップを組み合わせたアプローチに取り組み、総合的な分析を行なったことは評価できる。また、諸外国の予測活動への国際的な協力や国際共同研究を実施したことなどの点で高く評価できる」。

次に、8ポツ、科学技術と社会の包括的な関係に関する調査研究については、12ページの上のほうでございます。「科学技術と社会の関係に関する調査研究は、日本が科学技術立国として発展し、それを継承発展していく人材を育成する上でも、重要な課題と言える。今期中期計画期間においては、研究所のマンパワーの範囲内で調査研究をおこなってきたが、今後は、国際動向にも留意し、関連する様々な分野の外部の専門家との連携強化を図ることが期待される。また、対象テーマを的確に絞って、調査研究の目的や意図を明確化し、手法を熟考し、進めることが望ましい。ナイスステップな研究者については、活動としては定着しており、今後は広く一般社会での認知度が高まるような取組みが期待される」。

続きまして、9ポツ、第3期科学技術基本計画のフォローアップに資する調査研究。こちらにつきましては、13ページの中ごろからでございます。「総合科学技術会議の付託を受けて、前回に引き続き、第3期科学技術基本計画のフォローアップ調査を実施したことは、研究所が政策部局のニーズに的確に応えたものと評価できる。また、統計的分析から統計データには現れない部分を見いだすためのインタビュー調査まで、多様なアプローチにより分析調査を行っていることは評価できる。科学技術人材のキャリアパスに関する調査結果は注目すべきものであり、今後、インプット・アウトプット分析に利用可能となる発展的・継続的な調査が行われることを期待する。大学の競争力の強化の分析結果などの研究成果

は、情報発信することで広く活用されることが望まれる。科学技術基本計画のフォローアップ調査は、今後とも、研究所が継続的に進めるべき活動であり、次期科学技術基本計画のフォローアップに際しても、引き続き重要な役割を果たすことを期待する」。

続きまして、10ボツの科学技術政策の成果等の評価についての調査研究。こちらにつきましては、14ページが一番下でございます。「研究活動のアウトプットである論文や特許のデータベースを用いて、我が国の研究活動状況の定量的な把握に努めている。科学技術政策の成果を定量的に評価することは一般的に難しいが、サイエンスマップのような独自の調査手法を生み出していること、IEEEの論文分析から日本の研究の問題点を明らかにしたこと等オリジナリティの高い研究成果は評価できる。また、定量的データに基づく体系的な分析の成果を科学技術指標としてとりまとめ、毎年これを更新していることは、科学技術政策研究分野における中核的機関としての重要な機能を果たしていると言える。さらに、科学技術の状況に係る総合的意識調査（定点調査）は、日本の科学技術システム全体の状況変化を明らかにするための極めて重要なデータを提供しており、高く評価できる。科学的根拠に基づく科学技術政策の企画・立案の重要性が益々高まる中で、研究所は、今後とも行政部局が科学技術政策の成果等を把握・分析・評価する上で必要な基礎的、基盤的なデータや分析結果等を、適時的確に提供していくことが期待される」。

【阿部委員長】 じゃ、ここで一たん切りましてご意見をいただきたいと思います。

【都河委員】 委員の皆さんのコメントを読み、良い点をついていると思いました。

例えば5については、科学技術システムに関する調査研究の評価で、隅藏委員が『Nature』、『Science』のポリシー関係のセクションにも投稿したらどうかと書いてあります。この点は前々回の外部評価で松本委員が言われていました。英語版報告書は出ていますが、英雑誌への論文投稿は少ないと思います。もっと踏み込んで、『Nature』や『Science』等の投稿が望まれると書き入れたらと思います。他の個所でもそうですが、委員のポジティブな提言を組み込んでいただきたいと思います。

【阿部委員長】 ありがとうございます。それから……。

【高橋委員】 よろしいでしょうか。

【阿部委員長】 どうぞ、どうぞ。

【高橋委員】 6番のイノベーションのところも、結構違和感を持った1つの項目でして、特に10ページの2段落目の終わりのほうに「全国イノベーション調査については、今後は実施の周期を短くして継続的に実施し、データベースを逐次更新していくことが期待される」

とあるんですが、こちらの委員からは実施の周期を短くしたほうが良いという提言はないんです。自己評価にあったのかもしれませんが、そういうのをこの評価委員会の報告書に入れるのは、ちょっとおかしいのではないかと思います。イノベーションに関して「評価できる、評価できる」で、しかも最後のところの、大体「今後とも」という書き方になっているんですけど、「今後とも、独自の切り口からより深い分析とポイントを押さえた提言の発信が望まれる」という表現だと、今も独自の切り口からより深い分析とポイントを押さえた提言をしていて、それが今後とも続くことを望んでいるみたいなんですけど、こちらの委員から出ているのは、今それができていないから、やってねというコメントが多かったと思うんです。ほかの部分も、「今後とも」で、こういう形に何とかが望まれるという書き方が頻出するんですけども、これはずるいと思います。

私、このイノベーションのところも一番違和感があったので、独自に皆さんの意見をまとめてみたんですけども、まとめるとすると、素直にまとめるとこうなるということです。「研究内容の質的向上が見られ、測定手法の工夫もなされ、重要な調査分析が報告されている。この成果を広く広報して民間企業や大学等にフィードバックするとともに、論文として公表した部分以外もできる限り多くのファクトを基礎資料として公表したほうがよい。データベースの型が古く、長期的な調査研究を阻んでいるように見えるので、目標年度を定め、データベースの改修と他機関との連携を次期中期計画に盛り込む検討をしてほしい。今後もテーマを選んで調査研究を続けるべきだが、他機関の調査にはない特色を出してほしい」というようなところが、皆さんのコメントを素直にまとめたところだと思います。それに比べると、こちらの今の案はちょっとずれていると思います。

【阿部委員長】 はい。どうぞ。

【新井委員】 ちょっとお尋ねなんですけれど、複数の委員がSをつけた項目と、複数の委員がBをつけた項目というのがあります。でも、複数の委員がSをつけたというのは高く評価している方が多いということだと思うんですけど、特に8の科学技術と社会の包括的な関係に関する調査研究では、6人の委員がBをつけていらっしゃいますが、この評価の書きぶりが、Sが複数ついているところとBが6つもついているところでは、あまり変わっていない。これは、評価というSとかAとかとは無関係にお書きになった感じなのかなという気もするんですけど、SとかAとかBとかいうことを書くように求めたのであれば、やはりその平均値であるとか、そういうことはある程度念頭に置いた書きぶりになるのが自然かなとは思ったんですけど、事務局はどういうお考え……。

【伊藤総務研究官】 すいません。今のは特に、ご指摘のこの8の点につきましては、12ページの評価でございますが、少しわかりにくいというか、甘いように見えるというのは事実でございます。

ただ子細に見ますと、実は、評価できるとか、高く評価できるという表現はここには使っておりません。課題としては重要な課題と言えると。これは委員の方々からいただいたものです。いきなり次に、何とかが期待される、何とかが望ましいということで、重要だということであって、我々としてはそれを受けとめて、ちゃんとやったのか、やっているかどうかという評価が実はここは抜けておりまして、そういう意味では、そこは十分な取り組みがなされていないという具体的な評価をここにご指摘のように書く必要があるのかと思います。

【阿部委員長】 事務局としては一応……。

【伊藤総務研究官】 一応役所言葉的に書き分けてはおりまして、高く評価はできないと。

【阿部委員長】 新井委員じゃなくて、委員側から見ると、あまりそれがもうちょっと……。

【伊藤総務研究官】 はっきり見えないと。

【阿部委員長】 はっきり見えるようにしたほうがいいんじゃないかということですね。ありがとうございます。

【茶山総括上席研究官】 ご示唆いただいた内容のほうについては、外部の方の意見を取り入れるようにとかテーマを絞るべきだということで、工夫はしておるんですけども、またそこは相談をさせていただきながらと思います。

【都河委員】 委員のコメントの16ページで若杉委員のコメントを入れていただきたいなど。

【阿部委員長】 16ページ、若杉委員。

【若杉委員】 事務局が出されている評価の案に関しては、私自身もそれぞれ1つ1つ考えるといういろいろ申し上げたい点もないわけではないので、議論の場所に出して、それを踏まえて、文章についてはどこかで再度、整理する必要があるように思います。今ここで、直ちに全部整理し切れるものでもないと思うので、例えば12ページのところで書いていただくとすれば、難しい問題なんだという認識を入れていただき、その上で本格的にきちんと取り組みをしていかなきゃいけない課題だというニュアンスを入れていただければ、私

としては大変ありがたいなと思います。

いろいろここで議論させていただくことについて、ディフェンシブでなく事務局のほうでも前向きに取り上げて戴ければ良いのではないかと思います。我々としては、この研究所が非常にいい研究所で、さらに発展してほしいという気持ちが強くあり、その基本スタンスは多分共有できていると思いますので、ぜひそういうことで、織り込んでいただける部分があれば織り込んでいただくというほうが、結果としていいんじゃないかと思います。

【阿部委員長】 ありがとうございます。そのとおりだと思います。

【隅藏委員】 私も、今おっしゃった意見に同意しております。何のためにこの機関評価のレポートを出すかということにもなってくると思うんですが、レポートを出したら出したで、いろんなところでひとり歩きしていろんな方がお読みになる中で、こういう分野の研究とかこの研究所の活動がさらに盛り上がり発展していくことを目標に置きながらこれを書くことにすると、ある程度率直な意見を踏まえつつ、さらにこれからどんどんこういうふう発展するんですよというメッセージが、そしてこうした研究が必要なことなんですよというメッセージが、今後このレポートがだれか別の第三者、この分野以外の方々に読まれた場合にも、メッセージとして伝わっていくといいんじゃないかなと思いました。

【阿部委員長】 今読んでいただいたところで、ほかにございますか。

じゃ、もうちょっと進みましょうか。今後の方向性。

【牧企画課長】 資料1の16ページ、最後の表裏のところになります。まず、1ポツでございますが、科学技術政策研究所の役割ということで①と②に書かせていただきました。

①につきましては、科学技術イノベーション政策研究の高度化と研究コミュニティの活性化とタイトルをつけております。

【阿部委員長】 これ、全部読んでください。

【牧企画課長】 わかりました。「より効果的な科学技術イノベーション政策を立案するとともに、社会・国民に対する政策に関する説明責任を十分果たしていくために、客観的な根拠（エビデンス）に基づいた政策立案・評価がより強く求められるようになってきている。第4期科学技術基本計画に向けた検討においても、『政策のための科学』の推進が重視されている。科学技術政策研究所は、科学技術イノベーション政策の科学を担う中核機関として、この『政策のための科学』の発展に資する諸活動を展開することが期待される。

具体的には、科学技術イノベーション政策研究に係る調査手法の高度化をさらに進めるとともに、国立試験研究機関であることを活かした基盤的な統計調査や調査研究を引き続き実施していくことが求められる。また、個別の調査研究の実施に加え、国内外の政策研究の状況も踏まえつつ、研究所の成果を『統合化』して行政部局等に使い易い形で提供していくことも必要である。さらには、科学技術政策研究所が取得した調査データ等のより一層の活用を通じて、この分野の研究コミュニティ全体の発展にも貢献することが望まれる」。

②といたしまして、行政ニーズへの対応と行政ニーズの先取り研究の強化。「科学技術政策研究所には、行政直轄の調査研究機関として、文部科学省、総合科学技術会議等の行政ニーズを十分に踏まえた調査研究の実施が求められる。個々の調査研究の成果については、独自の深い分析を加えた上で、得られた示唆・含意を行政部局等に対して明確に発信できるようにすべきである。また、行政ニーズを踏まえた調査設計を心がけることが必要であり、このため日常的に行政との連絡・情報交換を密にしていくことが望まれる。他方、単に現在の行政ニーズを踏まえた調査を行うだけでは、研究所の活動として完全とは言えない。数学研究に関する調査に見られたように、行政が未だ気づいていない課題を掘り起こし、これを明らかにするための調査研究に取り組み、その成果を行政部局等に向けて適時的確に発信していくべきである。そのためには、従来行ってきた個別の調査研究をミクロな視点で行うだけではなく、上記①の『統合化』を十分に意識して、マクロな視点から将来の課題を見通し、自発的かつ深く掘り下げた調査研究を行うことが期待される」。

2ポツといたしまして、今後取り組むべき調査研究領域と研究の方向性でございます。「これまで実施してきたイノベーションに関する調査研究、科学技術システムに関する調査研究、将来発展すると考えられる分野・領域の探索に関する調査研究、科学技術と社会との関係についての調査研究、科学計量学的研究などについては、今後ともこれを継続することとし、研究の質の向上や調査手法の高度化を図っていくべきである。具体的な課題選定に当たっては、行政ニーズを踏まえつつ、科学技術政策研究所でなければできない研究、オリジナリティの高い研究、政策的インパクトの大きな研究に力を集中していくことが求められる。その際、研究所外の専門家の協力を得ることを積極的に検討し、効率的な研究体制を構築していくことが望まれる。また、科学技術基本計画のフォローアップに資する調査研究については、引き続き研究所が担っていくべきである。研究所においては、この調査研究の実施に向けて、調査手法の開発等の準備を適切に進めていく必要がある」。

3ポツといたしまして、機関運営面での重要事項。①でございますが、情報発信力の強化。

「研究所では様々な研究成果を公表しているが、研究コミュニティ及び一般国民に対して十分な情報発信ができていたとは言い難い。今後は、研究成果の見える化を常に念頭に置き、わかりやすいウェブサイトの構築、英語による研究成果のとりまとめ、研究成果の学会等への発表などにより、研究所の情報発信を強化していく必要がある。これら積極的な情報発信を通じて科学技術政策研究所の国内外におけるプレゼンスを高めていくことが可能となる。また、研究所内の情報インフラの改善と事務体制の整備を進めていくことも必要である」。

②人材の確保と国内の研究者・研究機関との連携協力。「研究所では、これまで客員研究官の積極的な活用、政策研究大学院大学等との連携など国内の研究者・研究機関との連携協力を進めてきたところであるが、今後ともこれを拡大し、我が国の科学技術イノベーション政策研究の中核機関として、関連情報の流通、連携協力活動の推進等において関係機関のハブ的機能を果たしていくべきである。また、研究所が政策研究者のキャリアパスにおいて重要な機能を果たし、研究コミュニティに優秀な研究者を輩出していくとともに、科学技術行政官に対しても政策研究の知識・経験を高める機会を提供していくため、引き続き、大学、行政部局との交流や多様なバックグラウンドを持つ人材の採用に積極的に取り組むことが必要である」。

③海外との連携・協力。「研究所では、アジアをはじめとする海外の政策研究機関との情報交換を進めているところであり、今後とも国際的な協力活動を積極的に進めるべきである。また、海外研究者、留学生等の受入れについても積極的な取り組みが望まれる。研究所においては、自らの調査研究活動の高度化、内外に対する情報発信、国際コミュニティに対する貢献活動に、引き続き積極的に取り組んでいくことが期待される」。以上でございます。

【阿部委員長】 ありがとうございます。それでは、この今後の方向性について、ぜひご意見をいただきたいと思います。

【若杉委員】 ちょっと質問なんですけど。

【阿部委員長】 はい。

【若杉委員】 16ページが一番最後のところの、今後取り組むべき調査研究領域についてのご議論が整理されているんですけど、これは、ベースになっている議論はどこでやって、どういう形で事務局からご説明があったんですって。

【牧企画課長】 そうですね、個別の課題を今、個別に説明をさせていただいていると

ころでございますけれども、それらにつきましては、Sが多いものもBが多いものもございましたが、それぞれ重要な課題だということでご評価いただいたと認識してございまして、どこかをつぶしてどこかをやれという評価になっていないという……。

【若杉委員】 そうすると、これまでの評価を一応踏まえた上で、プラスアルファを書かれたということによろしいですかね。「今後ともこれを継続することとし」ということに関しては、評価では特に議論があったということではないということですか。

【伊藤総務研究官】 ええ、そういうことではございません。ただ、今も申し上げましたように、ここは柱しか書いておりません。イノベーションの関係とか何とかとか。よって、それぞれの評価を見させていただきますと、Aなり、少なくとも一番悪いやつでもBが書いてあったと。ただ、そのBのやつについては重要な課題であって、こういうやり方でやりなさいというご指摘を受けておりますので、すべての柱については現在やっているものを引き続きやっていきなさい、ただ具体的な選定に当たってはこういった観点から気をつけて探っていきなさいと、そんなような構成にはなっております。

【若杉委員】 わかりました。

【家委員】 いいですか。今のことも関係するんですけれども、おそらく研究所でおやりになっていることというのは、大きく分けると、継続的な定常業務としてのコア業務と、アドホックにいろんなところから委託されておやりになる業務と、それから非常に自発的に自主性を持っておやりになる調査研究の3つがあるかと思うんですけれども、それぞれに重要だと思って、我々外部の人間は、あれもあれ、これもやれ、もっとやれということをお願いがちなんですけれども、その辺のところは、やっぱり研究所側で自主性を持って、何でもかんでもやれるわけじゃないので、どういうストラテジーで行くかというところは所長をはじめ研究所側でストラテジーを立てられるべきことだと思うんです。

先ほどの評価の中でも、どこかに非常に微妙な言い回しがあったんですけれども、「研究所のマンパワーの範囲内で調査研究をおこなってきたが」と、これはほんとうの実態だと思うんです。だからその辺で、責任のない者はもっとやれ、あれもやれと言うけれども、研究としてどこに重点を置いていくのかということ、メッセージとしてお出しになっていくのがいいんじゃないかと思います。

これは評価報告書として出されるわけなんですけれども、これに対する研究所側のレスポンスというのは、今までお出しになっているわけでしょうか。

【牧企画課長】 機関評価でいただいたご意見を踏まえまして、私どもでこれから5年間

を見越した中期計画というものを立てていこうと……。

【家委員】 その中に含まれると。

【牧企画課長】 その中に、いろいろいただいたご意見を反映させていくということを考えています。中期計画自体は、独法だと法律上つくることになっているものなんですけど、私どもの場合は独法ではありませんので、法定化された中期計画ではなんですけど、これは自主的な取り組みとしてそういう計画を立てております。

【家委員】 個別の意見、提言はそれぞれいいことが書かれていても、それトータルで合わせると、とても研究所のキャパシティを超えるということも十分あり得ますので、選択の必要があるだろうと。

【伊藤総務研究官】 もしも許していただけるのであれば、この2番の方向性にといったような観点も少し加えさせていただくと、うちとしては今後の考える余地が出てくるということですよ。

【新井委員】 はい。

【阿部委員長】 どうぞ。すいません。

【新井委員】 今のご意見に関連する、マンパワーという、できる範囲というお話に関連するんですけども、今回の、次の目標のようなところには、方向性に関しては今までと同様というか、発展的に統計調査や調査研究を引き続き行っていくというお話だったんですが、今回出ている、先ほどポンチ絵として出ましたけど、政策のための科学というのを実現していくには、そういうデルファイ法のような、もちろん重要な研究だと思いますけれども、多分政策研で集められるデータベースだけでは、政策のための科学を実施するというのは事実上困難だろうと認識をしています。

今現在、政策のための科学の基盤となるような科学技術に関するデータというのは、例えば科研費の報告書でしたら情報研が持っていますし、研究者情報ですとJSTと情報研が連携して持っているという形ですし、図書であれば国会図書館が持っているという状況です。それぞれが今連携をしようとしているわけで、政策研はこの方向性の中に、データに関しての他機関との連携というのが入ってきていないなど。だから、こちらでまた別途買ったりつくったりするのか、それはちょっと多分予算が許さないだろうと思うので、そういうお金のかかるデータベース系のことをどういうふうにはほかの機関と連携していくのかということについて、ぜひご検討いただきたいなと思います。

【伊藤総務研究官】 まさに今の政策のための科学でいろいろと議論しております中に

は、データベースの多機関における連携であるとか、あるいは従来ないデータをどういうふうに整備すべきかといったような、かなり広いことを議論しておりまして、そういうところに当研究所も積極的に加わっておりますので、今ご指摘の内容につきましては、今後の方向性の中できちっと打ち出していきたいと思います。

【阿部委員長】 ほか、どうぞ。

【吉本委員】 前半の項目ごとの評価のところ、実際はどうだということが踏襲して詳しく書いてあるので、16ページ以降の今後の方向性のところは、ちょっと抽象的かなと思うところがあります。既に前段の評価のところで大体繰り返しているところがあるような感じがするので、前段で評価されたことを踏まえて、科学技術政策研究所が今後何に注力していくんだというところがあつた方がよいのではないのでしょうか。人材は幅広く、また海外とも交流していくということは繰り返し書かれているんですけども、じゃあ、これから必要な人材というのはどういうものか。例えば先ほど理科人材の話も出ましたけれども、科学技術の根幹は人材インフラなので、どこまで踏み込んで書けるかどうかわかりませんが、もうちょっと抜本的にここでの科学技術人材というのをどういうふうに考えてやっていくんだというぐらゐの色があつてもいいかなと思ひました。

ここで書いてあることは少し評価の繰り返しのようない感じがするので、もうちょっと野心的に書かれてもいいんじゃないかなという印象です。

【都河委員】 戦略と集中ですよね。

【吉本委員】 そうですね。もう少し、これをやるんだ、これをやっていくんだという主張があつてもいいんじゃないかという印象を持っています。むしろそういったところに対して先生方に、科学技術政策研究所が今後こういつた新しい、野心的なテーマに取り組んでいこうと思うんですけど、どうでしょうかねという議論の場のほうが、日本を活性化していくような感じがするんですけども。

【牧企画課長】 これからについては、ご指摘いただいた、コメントいただいたものを受けて、中期計画を我々が立てたときということを考えておりまして。

【吉本委員】 中期計画で具体化するという感じですね。

【牧企画課長】 そうですね。そういうのを今、考えておりまして。

【牧企画課長】 もしくは、例えばその選択と集中というものを意識してやれというようなコメントというのもありかと思うんですけど、そこは。我々としてはもっと、限られたものを投入していくに当たって……。

【阿部委員長】 我々の委員会として、選択と集中をするのは構わないですよ、大いに。だから、それを踏まえて政策研では具体的というか、お金にもかかわりますから、そっちとの関連で計画を立てるんでしょからね。

【桑原所長】 当研究所の機関評価は、今までご紹介しましたように、枠組みが必ずしもがちとしていないので試行錯誤でやってきたという面はありまして、今もう既定事実のように、このご評価をいただいた上で次の中期計画をつくと申し上げていて今後はそうするんですが、過去はその中期計画をつくるタイミングと機関評価をいただくタイミングが整合していなかったもので、中期計画ができちゃった直後ぐらいに機関評価のタイミングになって、そうしますと、そのときの機関評価は前回機関評価の後のパフォーマンスがよかったかどうかを見ていただくという通常の機関評価に加えて、これから3年間こういうことをやろうとしているということもご紹介しますので、その計画の内容について、その方向でいいのかどうかということもあわせてご意見いただいたようなケースが過去にございました。

それはちょっと、先ほどのようにタイミングの設計が必ずしもうまくいかなかったということで、今回からは基本計画のタイミングに合わせて、まず評価をしていただいた上で、それを踏まえて我々の計画をつくるという形にいたしますので、通常の機関評価の趣旨からすれば、今後をどうせい、ああせいということをご意見いただく場では必ずしもないんですけれども、そういう流れであるということで、それから過去においても、次はこういうところに、評価委員の先生方としてはウエートを置くべきであるというご意見をいただいて実際にレポートに書いてございますので、大きな方向性についてご示唆をいただければと思っているというところでございます。

特に、第1回目のときに申し上げたかと思えますけれども、政策研の、先ほど家先生がおっしゃった行政からのニーズで受け取るもの、継続的にやっていくもの、それからその時々
の研究者の発意でやっていくものと、このバランスをどうするかという議論はずっと大議論がございまして、第2回ぐらいの評価を受けた際には、もう少し行政ニーズ対応型のウエートを高めるべきであるというご意見をいただきました。

その後、ちょうど阿部先生が総合科学技術会議の筆頭議員をされていたような時期で、3期の基本計画をつくるためのレビュー作業とかいろんなことが動きまして、そういうことにも参画させていただいたこともあり、その次の機関評価のときには、前回宿題だった行政対応はかなり進んだ、むしろちょっとそこが進み過ぎて自発的に先を見る研究というの

が薄くなっているんじゃないか、今後はちょっとそっちも力を入れなさい、もうちょっとバランスを戻しなさいというご意見があったと。その流れで今回に来ているということですので、そういう大きな枠組みについての先生方のご意見、既に一応お書きはいただいているんですけども、今日そういうことを賜れば、それに記していきたいと思えますし、あるいは先ほど来、マンパワーの制限もありますから、どこにどのぐらいのウエートをかけるかという優先順位をどう決めるかということがやはり最終的には必要になってまいりますので、それについてのご意見もさらに付加的なものがあれば承れればと思っておりますということでございます。

【阿部委員長】 ほか、ございますか。あのね、私が言うのがいいかどうかわかりませんが、行政ニーズへの対応、行政ニーズの先取り研究の強化というのは、第3期基本計画を例示に出されましたが、これは非常によくやっていただいたと私は思っておりますが、難しいのは、現在の行政で何か、ある計画が進んでいることへの評価。一番はっきりしているのは第3期基本計画への評価。これは、科学技術政策研究所という行政機関の一部で、文科省あり、総合科学技術会議ありと、その意向というか、そのニーズにどうしても拘束されちゃうんですが、そのニーズに拘束され過ぎると正確な評価が曲がっちゃうんですよ。そこが私は、政策研の一番つらいところじゃないかと。

今やろうとしている行政ニーズとか先取りについては、そういうしがらみを、多少はありますけれども、乗り越えてやっていただけてきたように思うんですけどね。そこが非常に難しい。特にお金を出して、どこからお金が出てくるかによるんですが、ここでお金を出しますからこれを使って調査してくださいというと、非常に否定的なことを言いにくくなっている。特に同じ行政機関ですと。じゃ、民間だったらいいかと言うと、民間の調査機関は商売ですから、もっとそこは実は怪しいことが起きる可能性もあるんですけどね。そういうのをどういうふうに乗り越えていくかというのが、書いていただくには生々し過ぎるんですが、ぜひご参考にしていただければと思います。

【桑原所長】 今おっしゃった評価のところというのは、国立研究所であるがゆえに、実は非常に難しい部分でして、この数年来、中国、韓国の政策研究機関と毎年1回定例ミーティングをやって、若手中心にいろいろ研究発表を2日間ぐらいやると。2週間ほど前に韓国で今回あったんですけど、それに出ていて思ったんですが、中・韓の研究機関の発表は、中身のすばらしさは置いておいて、テーマの枠組みとして、やっぱり政策を評価するというのがかなり強く出ているんです。かなり色濃く出ているんです。NISTEPは、そこはちょ

っと正直腰が引けています。腰が引けている部分があります。というのは、文科省という1つの省庁に属しちゃっているということなので、そういうバイアスの中に我々いるわけですから、完全にニュートラルなポジションでできないという自覚はある種ありますので、そういうこともあるんですけど。

いろいろ発表を聞いていて、中・韓が、じゃ、それを完全に評価できているかどうかは別なんですけど、どういう枠組みで取り組むかということについては、ちょっと差があるなど。果たしてこのままでよいのかどうかということ、自問自答しながらその会議を聞いていたんですけども。

阿部先生の今おっしゃったところは、非常に重要で、ただ、私たちにとってはなかなかハンドリングが難しい部分というところは事実でございます。

【阿部委員長】 今後の方向性は、かわりの文章はないですか。

【高橋委員】 かわりの文章はないです。(笑) 提案として、ここはもっとすっきりしたほうがいいかなという感想は持っています。ポイントは、柱立てはこれでいいと思うんですけども、例えば1の②の「そのためには、従来行ってきた」云々かんぬんというようなことは、私だったら削ります。あんまり意味のない文言のような気がします。要するに、「発信していくべきである」だけでこちらとしては方向性を示すことになっていて、あとのことは言わずもがなかなと思います。

それから日本語的には、17ページの3の②の輩出というのは、研究者が輩出するというのが正しい使い方だそうでありまして、だから、この場合は研究者を輩出していくというのであれば「研究者を送り出す」とかしたほうが、日本語としては正しいかと思います。

【阿部委員長】 輩出。

【高橋委員】 はい。よく間違えるんですけどね、みんなが。優秀な研究者を輩出……。

【阿部委員長】 あ、ここね。はいはい。

【高橋委員】 この輩出という言葉は、「が」が主語に来るそうです。

【阿部委員長】 ありがとうございます。

【都河委員】 ちょっといいですか。

【阿部委員長】 どうぞ。

【都河委員】 今後の方向性の文章は、わかりやすく読めていいなと思います。質問ですが、一番最後の海外との連携協力で2行目に、「留学生の受け入れ」がありますが、NISTEPで留学生を受け入れているのでしょうか。

【牧企画課長】 今、受け入れの例はないです、ここ5年間。過去にはありました。

【都河委員】 大学ですと留学生を受け入れ、育てて学位等を持たせて帰すわけですが、NISTEPではどのように留学生を受け入れるつもりなのかと、見えてこなかったもので。

【牧企画課長】 過去には研究者がNISTEPにしばらく滞在をして研究するという例はあったんですけども。

【奥和田センター長】 実績について申しますと、例えば学生研修という枠組みがございまして、それによって、ある一定期間、留学あるいは留学生のような形、留学生に限りませんが、外部の学生をこちらにお預かりして、一緒に研究させるという制度はございます。

【都河委員】 外国から直接ですか。

【奥和田センター長】 外国からもそれは可能でございます。ただ、実質的にはここに書かれているように、過去5年間の場合、非常に短期間、例えば1カ月とかそういう単位ではございましたけれども、長期にはなかったという意味です。そういう意味で、留学生を長期にこちらでお預かりしているケースはないということを示しております。ですから、別に学位等を与えて送り返すとかという意味の留学生ではございませんが、ここで一緒に研究させることはできるという意味を示しております。

【阿部委員長】 これは今のご質問、ご指摘をいただいて考えてみると、意外と難しいですね。

【若杉委員】 追加的な。16ページ、17ページに関して言うと、私も先ほどの高橋委員の発言に賛成で、ここで、そのためには何かするとか、そういうことはあまり書かなくていいんじゃないか、指摘をきちんとしておくということから言うと、全体がもう少し短くなってもいいんじゃないかなと思います。例えば1の①で言えば、具体的にはということがいろいろ書かれていますけれども、十分にこなされているとも思えないので、むしろ基本的にどうすべきかを前段にきちんと書いているわけですので、そこを中心にして整理されていいかと思います。

それから、②のところも、阿部先生がおっしゃっているように、文章をよく読んでみるとすごく微妙に書かれているなというのがよくわかって、行政ニーズを踏まえることが必要なんだけれども、他方、それに引っ張られているだけじゃだめなんだというふうにも書かれているので、そういうことであればまさにおっしゃるように、「そのためには」というのはあんまり余計なことで、書かなくてもいいのかなという気もしますし、それから17ペ

一ページの上のほうから言うと、4行目あたりから「その際」とか、やや具体的に立ち入って少し書いてありますけれども、これもいろんなことがあり得るので、あえて書かなくてもいいのかなということとか、やや各論に関連して、こういうためにはこうしたほうがいいとかというのはあるんですが、それは中期計画の中で引き取っていただくことで十分ではないかと思われまます。我々としては、こういうことが必要なんだ、あるいはこういうことを心がけるべしということだとどめていただくのが全体としてすっきりするんじゃないかなと思うので、少し修文を頂くと良いのではないかと思います、いかがでしょうか。

【阿部委員長】 皆さん、いかがですか。今、そういうご提案がありました。

そうしましたらここに限らないですが、今後の方向性については、今までの委員のご意見を踏まえてかなり大きく修文していただくことになるかもしれませんが、それでいいでしょうか。

そうしましたら、戻りましてというか、全体を見て、評価について今までいろいろご意見がありましたけど、加えて何かございますか。

【高橋委員】 「評価できる」という言葉なんですけれども、私、個人のときは自信がないから「評価できる」にしたんですけど、この委員会として出すときは「評価する」でいいんじゃないでしょうか。

【阿部委員長】 例えば。

【高橋委員】 いっぱい「評価できる」がたくさん出てくるんですけど、あらゆるところに。

【高橋委員】 だから、あんまり……。

【阿部委員長】 「高く評価できる」。ああ、そうか。

【高橋委員】 そういうところね。だから、「高く評価できる」という言葉は、もうちょっと減らしてほしいとは思いますが、評価するなら「評価する」のほうがよくはないでしょうか。

【阿部委員長】 なるほど。それは、「評価する」のほうが委員会の責任が大きくなります。「できる」だとちょっと……。「できる」より「する」のほうが責任が大きい。

【高橋委員】 だから、その部分をぐっと絞ってほしいということと一緒にですけど、どうなんでしょうか。

【阿部委員長】 いやいや、それは、「できる」というのは誤解を恐れずに言えば、若干委員会の引けた表現だというわけですか。(笑) もっと堂々と評価する場合は「評価する」

でしょうね。

【牧企画課長】 そうすると、そういう記載についてはポイントポイントでそういうふう
うに書くという。乱発しないようにするということ……。

【阿部委員長】 それで、どうしても「できる」のほうがいいところがあったら、残し
ておいてもいいんですけどね。いいですけども、「できる」ばかりが多いのは、多分少し
無責任ではないかなというご意見ではないかなと思います。

【高橋委員】 はい。

【阿部委員長】 ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。

【牧企画課長】 2章のほうの評価のところの書き方、書きぶりなんですけど、私どものほ
うで大分丸めて書いてしまっているようなところはあるわけなんですけど、それは、後ろは
大分すっきりするという方針をいただきましたけれども、こちらのほうは逆に、もう少し
詳しく書くという方向……。

【阿部委員長】 2章というのはどれですか。

【牧企画課長】 3ページから15ページまでの間でですけども。

【都河委員】 せっかく高橋委員が書いてきてくださったので、それを参考にしてそろ
えるというのはどうでしょうか。

【高橋委員】 これは単純にコメントをまとめただけです。

で、「評価できる、評価できる」という語尾が同じになるのも避ける。

【阿部委員長】 では、今のご意見は収束に入りつつあるご意見なので、収束に入って
よろしいでしょうか。収束に入るとしますと、私が発言しなきゃいけないことになると思
いますが、今日いろんなご意見をいただいて、私の両側お二人のご意見は、繰り返しませ
んが、繰り返したほうがいいかな、やっぱり甘過ぎる文章が羅列してあるよりはきちんと
した厳しい文章も中に織り込んでいくほうがいいということが1つと、もちろん高く評価す
るところは、褒めるところは褒めて構わないと思うんですけど、それからもう1つは、委員
のご意見をもう少しきちんと文章の中に取り込むということだろうと思いますが、それは
先ほどご意見をいただいた人材のところに限らず、すべてに共通すると思いますので、そ
こは事務局でぜひもう1回汗をかいていただきたいと。

そのとき具体的にどうするかということですが、高橋さん、いいですか。文章を提出し
ていただいても。

【高橋委員】 これは別にいいですよ。要らない紙の裏に印字してただけですけど。

【阿部委員長】 その裏のほうが重要だったり、そんなことはないですか。

【高橋委員】 裏は全然重要じゃないです。(笑)

【阿部委員長】 下さるそうですので、それも参考にさせていただいて、それから事務局で手を入れていただいて、あるいはその前に皆さんでもう少し、細かい字句も含めてこうしたほうがいいのかということがあれば同時に事務局にメールか何かで送っていただくといいと思いますが、多分それはほとんどの方はなさらないんじゃないかと思いますが、それはぜひお願いしますけれども、高橋さんの文章だけじゃなくて今日いただいたご意見を踏まえて全体を見直していただいて、変えていただいたというか、改良していただいた文章を皆さんにメールで送っていただいて、これはご意見をいただいた方もいただいていない方も含めて、それで1回で終わるかどうかわかりませんが、できれば一、二回で収束をするということに行けるんじゃないかと思いますが、先生方どうでしょうか。もう1回ぜひ開けという人はいますか。多分お忙しい方ばかりですので、それでいけるんじゃないかと思いますが、委員の方はそれプラスアルファ、私が結論的なことを言いましたけど、抜けているところがあったら。

【若杉委員】 それで私は手続上は賛成です。最後に、最終的な修文などの整理は、私は阿部委員長に御一任するというのをここでお決めいただく必要があるんじゃないかなと思います。

【阿部委員長】 ありがとうございます。その前提として一、二回メールのやりとりはやってください。それで、その最後は今ご提案いただいたように委員長預かりということにさせていただきますが、よろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

【阿部委員長】 それでは、ありがとうございました。事務局で今の結論に対して、いやいや、これはこうだというのが何かあったらどうぞ遠慮なく。若杉委員のお話じゃなくても、あまりディフェンシブにならないで。

【伊藤総務研究官】 すいません、いただいたコメントを大分お役所言葉にしてしまいましたので、必ずしも委員皆様方の趣旨が反映されてないということにつきましては、委員長ご指摘のように直させていただきたいと思います。

ただ、私がさっき申し上げましたように、コメント集だけでつくりますと実は全体像で抜けているところがたくさんございます。それはやはり、我々のご説明させていただいた自主的な評価をよしとするかどうかということは一々確認をしておりますので、そうい

う意味ではそこを少し書かせていただいて、それに委員の方々のコメントを加えるような形でまずはつくらせていただいて、それでご確認をと考えます。

【阿部委員長】 私はそれはそれでよろしいと思うんですが、改正文面をメールで送っていただいたときに、事務局の自主評価が少し違っているときはご意見を皆さんからいただければいいわけですから。

【伊藤総務研究官】 はい、そうです。もちろん。

【阿部委員長】 それでいいですね。じゃ、そういうことでよろしゅうございますか。

(「はい」の声あり)

【阿部委員長】 それじゃ、よろしければ終わりますが、何か言い残したことはよろしいですか。委員会のほうはこれで閉会としますが、あと事務局、お願いします。

【牧企画課長】 ありがとうございます。また文章を作成いたしましてご連絡させて、何度か往復をさせていただくかもしれませんけれども、よろしくお願いいいたします。今日はどうもありがとうございました。

【阿部委員長】 2回ぐらいで大丈夫ですよ、そんな。(笑)

【牧企画課長】 大丈夫でしょうか。10回にならないことを……。できるだけいい案を出すようにいたしますので、よろしくお願いいいたします。

【阿部委員長】 お願いします。大変ご苦勞をおかけしていますが、よろしくお願いいいたします。じゃ、どうもありがとうございました。

— 了 —